

イエスはアヘンではない

(ヨハネ一六・一〜一六、三三)

職業柄(？) 格言、名言の類を引くことが多いが、正直それらを理解するのは容易なことではない。元の文脈から切り取られて引用されているのだから真意がつかみづらいのだ。一例を挙げるなら「宗教は民衆のアヘンである」アヘンを毒薬と解するか鎮痛剤と解するかで意味はだいぶ変わってくる。ちなみに日本共産党のウエブサイトでは後者の意味に取り、マルクスは宗教に対する批判はしたが侮蔑してないという見解を導き出すのだがちと苦しい。毒であれ麻酔であれ宗教は変革に対する諦念をもたらすと言っているのだから。畢竟アヘンから良いイメージは出ない。時にイエスはどうか。弟子たちの感情を慰撫し、あきらめを与えるような甘言を弄したか。否である。この箇所ではイエスは弟子達が近い将来体験するであろうことを三つ、真正面から語っている。

一、自らの死と復活

イエスはすでに自らが弟子たちの

もとを去ることを語っていたが(一四・二八)、彼はここでも自らが遣わされた方、即ち神の御元に行くことを語られている。興味深いのは共観福音書ではイエスの死は受難、即ち「苦しめられ、殺される」という受け身のかたちで主に書かれているのに対し、ヨハネ福音書ではイエスご自身の能動的行為として描かれていることである。イエスは弟子たちを愛していた。極みまで愛していた。しかし、いやだからこそ真実を伝えたのである。人の情愛は時に「優しいウソ」という仇花を咲かせる。しかし真理そのものであるイエスは真実を語ることをためらわない。よし弟子たちの心が悲しみでいっぱいになったとしても(六節)である。我らが主のことばにはアヘンのような刹那の陶酔をもたらす要素はない。

二、追放と迫害

二節を見るとそこには主の弟子たちがユダヤ教の会堂から追放されること、また弟子たちの中には殺されるものが出るということが書かれている。聖書に詳しい人はこれを聞くと「使徒のはたらき」の七〜九章辺りのことを思い浮かべることが出来るだろう。青年サウロ(後の使徒パウロ)によるユダヤ人キリスト者に対する迫害である。サウロはステパノの殉教に一枚かんで

おり、またダマスコの諸会堂に居るキリスト者をエルサレムに連れてこようとした。また彼がキリスト者を迫害したのは彼が神を信じていなかったからではなく、むしろ彼の神への盲目的ともいえる熱心の故であった(ピリピ三・六)。だからこそ彼はイエスの声を聞いたとき、その声に対して「主よ、あなたはどなたですか」と呼びかけた。しかしこれは弟子たちにとって恐ろしい予告であった。しかしイエスは敢えて彼らに真実を告げた。その事実を直面したときに、このことを思い出すためである。ここにもアヘン的な要素は皆無である。

三、聖霊の降臨

こうして弟子たちが師と仰いだナザレのイエスは自らの死とよみがえり、父のみもとへの帰還、即ち昇天、更にはその後起こる迫害の現実を先取って弟子たちに告げられた。これらは弟子たちにとって悲しく、厳しいことばかりであった。しかしイエスはこれから弟子たちの近未来に起こって来る苦難さえ「益」であると断言する。その理由は明瞭である。自ら天に昇ったイエスはそこからもう一人の助け主である聖霊を弟子たちの共同体に派遣されるからである(七節)。その聖霊は現時点でイエスと神のみごころを知らない者たちの心に働いて罪の悔い改めを迫り、死んでいた

霊を新しく生まれさせるいのちの御霊であり、同時にすでに信仰を持っている者たちに対してはイエスのことばを思い起こさせ、かつその教えを語り示すことにより、彼らをすべての真理へと導かれるお方なのである。

* * *

「宗教は民衆のアヘンである」はマルクスだがその思想を実験した男、レーニンはさらに進んで宗教を毒酒と評した。その背景には当時の(ロシア)正教会が権力と癒着し腐敗していたという状況があったという。富や権力と結びつく宗教は腐敗する。これは古今東西変わらない真理だ。そういう意味では宗教はアヘンにも毒酒にもなり得ることは認めざるを得ない。しかしそれら「宗教」と私たちの主イエス・キリストご自身は厳正に分けられなければならない。なぜならイエスは富や権力と完全に絶縁していたからだ。イエスは上から目線の師ではなく、弟子たちの真実な友であり、優しいウソや心くすぐる甘言を囁かずに真理を貫き、御心に従い神に捨てられることにより人の罪を贖ったお方である。彼は真実かつ真理そのもの。気高く、強く、優しいお方であり、罪の世に対する勝利者である。アーメン。